

小堀流踏水術について

The Tosui art of Kobori

1K05B182

指導教員

主査 寒川恒夫先生

筈井 翔太

副査 奥野景介先生

私は、幼少時代から現代に至るまで、水泳競技を続けてきた。(財)京都踏水会水泳学園は、もともと日本泳法を伝承しているスイミングスクールであり、4泳法(クロール・平泳ぎ・バタフライ・背泳ぎ)の他、古式泳法も同時に習得していく。伝承している流派は小堀流踏水術である。今日まで水泳競技に携わり、日本泳法という競技があることはもちろん知っていた。しかし、どのようにして誕生し、発展し、現在まで伝承されてきたかを学ぶことはなかった。もちろん、日本泳法があったから、現在の日本の競泳競技や水球競技・シンクロナイズド・スイミングがあることは間違いないはずである。そこで、私は、文献をもとに日本泳法の発展までの過程や伝承方法、流派について調べ、特に私が学んでいた小堀流踏水術について、稽古場へのフィールドワークを行い、日本泳法の現状や今後の見通しについて研究することにした。

日本泳法とは、「水術」「水芸」「遊泳術」という様に、武術の一つとして今日に泳ぎ継がれてきたものと言える。日本が島国であるので、日本に水泳術が発達するに至る別の理由があると考えられた。大小の島々で成り立つ島国であり、国土は他国に比べ幅狭く、細長く、そして山が多く平地が少なく、一方多雨地帯であるからして、至るところに川があり、多くは急流である。そういった国であるから、武人は剣術、弓術等と同様に水泳術を鍛錬することが必要となり、水泳術が武術の一つとして発達するに至ったといえるであろう。これは、日本が島国で、加えて多雨地帯という風土の特質による、日本の地理的特質からくることで、日本独特のものであるから、諸外国にはあまりその

例がないのだと考えることが出来る。近代スポーツ・レクリエーションとしての水泳が欧米より取り入れられると、各地に温存されていた各流派の水泳能力が、これに結びつく結果となった。

日本泳法というときは、いわゆる水泳のほか、潜水、飛込方や水馬術までも含み、特に武術として研究の結果、一定の主張のもとに、水泳技術ならびに精神的な指導方法までが組織体系化され、かつ教授、伝承の制度までに確立したものを意味する。武術として、いわゆる武芸十八般や、武芸四門といわれる弓・銃・剣・馬を教習させたが、そのうちには水泳・水馬もあり、そのために特に水馬池・水練池などを設け、また川や海なども利用された利用されていたであろう。四国・九州・南海・伊勢・駿遠・房総方面に活躍した水軍には、もちろん水泳は用兵、武術の一科であったが、乱世の戦場ではその練磨の時間的余裕などはなかった。そのために、組織だった技法などは持たなかったのである。

小堀流は肥後の細川藩(現在の熊本)で発達した泳ぎである。細川藩の代々の藩主は泳ぎをよく奨励してきた。宝永時代、村岡伊太夫政文は泳ぎの奥儀をきわめ、泳ぎについて一層鍛錬した。また、一方では鎧を着けたまま河を渡ることや、馬に乗ったまま水中に入るにはどうしたらよいかと考え、浮櫓や浮帯なども考案した。村岡伊太夫の第2子小堀長順常春は、藩の茶道役頭をしていたが、父の跡をつぎ踏水術の師範にもなり、明治8年亡くなるまで踏水術を指導してきた。その間、宝暦6年には父村岡伊太夫から伝えられた泳ぎが後世にも正しく伝えられるようにと「踏水訣」とい

う泳ぎの本を出版した。ついで「水馬千金篇」も出版した。これらの本は、日本の水泳書の中で最も古い刊行物である。また、小堀長順や高弟たちが江戸の隅田川の薬研堀で泳いだときの泳ぎを絵にした巻物が残っており、これが「踏水譜」である。

小堀流踏水術の現状としては、伝統を絶やさないために生徒や指導者の増加を、重要と見て取り組んでいると考えていたが、そうではない。現在生徒の数も、減少傾向ではなく、地域のマスコミにも取り上げられており、考えていた以上に注

目されていることが分かった。各稽古場では、昔から続けられているカリキュラムを残しつつ新しい現代に合ったことを取り組むことにより、本質的に変わることはないが新しい日本泳法となっていると考えられている。しかし、未だ世間一般に多く知られていないスポーツであることは間違いない。(財)京都踏水会水泳学園では、スイミング・スクールとしての生徒数を増やしていきながら、より多くの人に日本泳法を知らしていく努力をされているのである。